**「古希の同窓会」に際してのご法縁**

佛照山　蓮　光　寺

「平成27年簡易生命表」によりますと、**「平均寿命」**が昭和35年では、男65.32歳／女70.19歳／平均67.76歳だったのが、平成27年には男80.79歳／女87.05歳／平均83.92歳と**16歳伸びています。**

また、昭和35年には5.7％（生産人口負担人員11.2人）だった**65歳以上の人口**が、平成26年には26％（生産人口負担2.3人）さらに20年後の平成47年には**30.9％（生産人口負担人員1.7人）**になると予想されています。

「国民生活の基礎調査の概要」による**世帯構成**は、昭和28年の1,700万世帯／世帯人員5人が現在5,000万世帯／2.49人となり、65歳以上のいる世帯では、単独と夫婦のみの高齢者世帯が56％、その内単独が半分となり「老老介護」や「孤独死」を考えなければなりません。

このような高齢化に伴い、高齢者を対象とした**シルバー産業**が成長し、最たるものが**介護サービス**。そしてその先にあるのが**終活サービス**。この終活サービスの商品選択を迫るのに出てきたのが**「エンディングノート」**。

人生の終末を考えるエンディングノートは、生年月日や趣味などの個人的な情報に始まり、財産に関すること、葬儀や遺骨・墓地に関すること、緊急時の医療に関すること、家族や知人へ伝えたい自らの思い、余生をいかに生きるかなどを記すようになっている。

これに記すことにより、当事者はサービスの必要性を感じ、探し求めるようになり、それに応えるように、従来にはない多様な商品やサービスが開発・提供され、一大マーケットとしての活況を呈しています。そして、これまでひとつの儀式とされていた葬儀は、もはや「終活」という大きなマーケットの中に取り込まれ、**葬儀は終活の一部分として考えるという経済的価値観が登場**しています。

こうした流れは、葬儀関連業者やマスコミから起こったもので、そこには僧侶などの**宗教者が不在**で、終活の多くは、宗教的な内容よりも、**相続や葬儀費用の経済的な側面に割かれる傾向にあります。**宗教的な要素があったとしても、焼香などの儀礼作法や、各宗派の紹介などほとんど従来の葬儀関連書籍の域を出ていないのが現状で、人が避けることのできない**「死」という問題について、宗教がどのように応えるのか、**という点については十分に語られていません。装束を着けて儀礼を行えば、儀礼としての葬儀は成り立ちます。しかし、**葬儀という儀礼を行うだけでなく、お釈迦様の説かれる「四苦八苦」・「愛別離苦」を縁として仏教と関係をもち、リアルな死について一緒に考えるという時間が必要になります。**

葬儀を経済的な側面からとらえてしまうということは、このリアルな死について十分に考える機会がないまま、あるいは拒絶したまま、いずれ死に直面せざるを得なくなり、死に向かえるだけの「死生観」を持ち合わしていないことになります。また、このことは**親族に対する価値、仏法の価値、葬儀に対する価値の付け方が解らず、金銭的な価値観のみになりつつあります。**

また、人間関係の希薄化は、いざという時の相談相手がなくインターネットや業者便りになっています。そのため、葬儀業者が葬儀を商品として宣伝をし、報道関係もそれに追随するため、悩みを抱えるものは業者の宣伝文句に惑わされてしまい易くなります。

このようになってしまった**葬儀ですが、される（送られる）側と、する（送る）側の二面があることを忘れてはなりません。**する（送る）側のことを考えるときに、日本人の遺骨崇拝を意識しておく必要があります。最近では、寺院参拝をしない人でも、春秋の彼岸会や盂蘭盆会などに、遺骨の納めてある墓や納骨所に参拝することが多いのが実情。これは、遺骨崇拝の意識が強いことが原因と思われます。この起因は、仏教の開祖である釈尊が**「遺骨は塔に納めるべきであり、四つ辻に修行完成者の塔をつくり、そこには花輪や香料や顔料を捧げ、礼拝するように。」**と指示したと言われ、釈尊火葬後の遺骨（仏舎利）の扱いから来ているとうかがえます。

**死別等による深い悲しみ・悲嘆・苦悩・嘆きを癒し、新生活への移行をスムーズにするという「死の受容」が重要なポイントになります。そして、その葬儀に関する儀礼の中に、仏教の教えがあり、その法縁に出逢って「人生無常の世界」を新たにし、残された者の歩むべき姿を示してくれるのです。**

人間生まれて、健康で活き活きとしているときは、人生はとっても嬉しいし楽しいものだけれど、老いて病んで命終えていくときになったら、坂道を転げ落ちるように、命に値打ちの無さを感じるような価値観の中で生きていたのではないのか。

人間は、老いて病んで死んでいくときに値打ちがないのではなく、必ずや佛にならせて頂く道を歩んでいるのです。ただただ灰になっていくだけの命ではなく、佛となっていく命なのです。

**生まれてきたから老病死を迎える。寺で聞かせていただく話を頼りに生きていく。どうしようもない苦しみの中で手助けてくれるのが仏教です。**